

今年度の発掘調査について概要を報告します

ウトロ遺跡発掘調査

今年度のウトロ遺跡発掘調査は4月下旬から調査を開始し、11月下旬に終了しました。調査の結果、竪穴住居跡が5軒、墓などが32基、焼土や獣・魚骨の集中痕跡などが広範囲で見つかりました。調査結果で特に注目すべきことは、貼床を有するオホーツク文化期の竪穴住居跡（7世紀頃）が検出されたことです。知床における貼床（はりゆか）住居跡の検出例は、斜里町ウトロや羅臼町などにあります。ウトロでは昭和34年に東京大学が調査したものが最初で唯一のものでした。一般的な貼床の形態は、片仮名の「コ」の字をしており、住居の入り口側が開いた状態（粘土が貼られていない）であることが多いのです。



貼床住居跡

このほか、住居の奥側（入り口の対面側）には動物の頭骨などを置く（祭壇を作っている？）ことが多く、その場所を「骨塚（こつづか）」と称しています。網走の最寄（モヨロ）貝塚遺跡からは、ヒグマの頭骨が多数出土しています。今回、ウトロ遺跡で検出された住居の骨塚からもヒグマの骨が出土しましたが、ヒグマ以上にエゾシカの頭骨が多く出土しました。ともあれ、動物の骨を置く風習はオホーツク文化期を示す特徴のひとつです。



シカの下顎骨が土器と伴って出土した
（土器はオホーツク貼付文土器）

発行 斜里町立知床博物館協力会

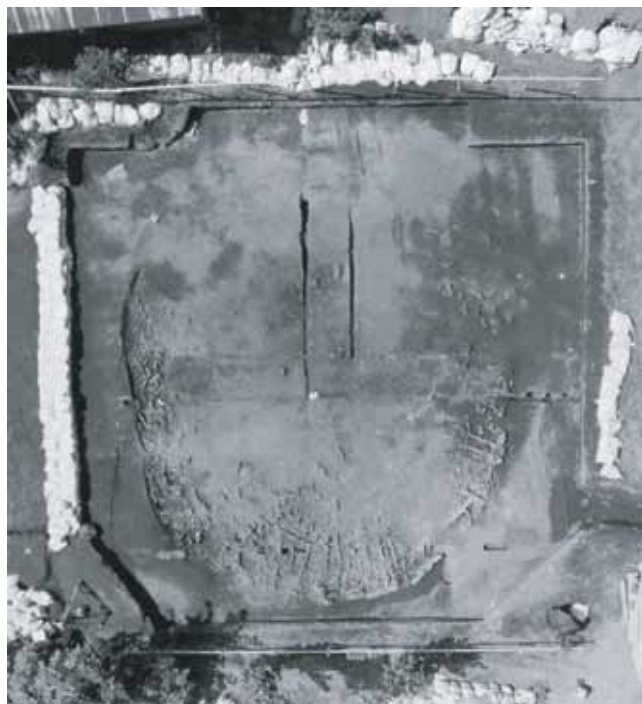
099-4113北海道斜里郡斜里町本町49

斜里町立知床博物館内

TEL:01522-3-1256 FAX:01522-3-1257

<http://www5.ocn.ne.jp/~museumsjp/>

来運1遺跡発掘調査



来運1遺跡空撮

来運1遺跡は昨年の国営畑総発掘調査で焼けた建物跡が発見されたことがきっかけとなって、今年度、国の補助によって発掘調査を行ったものです。

調査は夏場の7・8月の2ヶ月間で実施し、調査の結果、次のことが判明しました。

昨年度の重点調査課題であった壁立平地建物跡であるかどうかとの結論は、壁立てではなく伏屋式（ふせやしき）の屋根を持つ平地建物であるとの方向性が出されました。ただし、地形的に緩傾斜地に建てられているため、高い側の一部を掘り込み、壁を作り出す、言わば、一部掘り込みを持つ伏屋式平地建物跡ということが出来ます。

遺構に伴って出土した土器を見ると、縄文中期末から後期初頭に位置付けられるものであり、縄文中期末に平地式建物が竪穴住居とともに作り出されていたことが証明できたことは大いに意義があります。
（松田功）



炭化材出土状態